

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12196

研究課題名(和文)感情主義的徳倫理学の構築：マイケル・スロートを手がかりに

研究課題名(英文)A study of sentimental virtue ethics: focused on the philosophy of Michael Slote

研究代表者

林 誓雄 (Hayashi, Seiyu)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：20736623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、感情主義的徳倫理学の構築を目指し、当該分野の第一人者であるM・スロートの道徳哲学を解析し、その射程について検討するものである。年度ごとに予定していた研究課題は、(1)スロートの理論の再構成、(2)他の徳倫理学理論との比較検討、そして(3)応用倫理的な問題への適用、以上の3つであった。一部、計画とは異なる形で研究が進行したものの、当初の課題を概ね達成することができたと考えている。ただし、スロートの多作さのために、(1)の課題については不十分なものとどまった。とりわけ、「徳と幸福の完成不可能性」という論点については、そのさらなる検討が、今後の課題となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

義務論と功利主義につぐ第三の規範倫理学理論としての徳倫理学は、日本においてもここ数年、脚光を浴びつつある分野と言える。しかしその理論は、アリストテレス主義に根差したものがほとんどであり、議論も概ね、され尽くした感がある。本研究は、アリストテレス主義に対抗し、それを乗り越えるものとして、スロートが唱導する感情主義的徳倫理学に注目して研究を進め、それによって徳倫理学における議論の再活性化を試みるものである。アリストテレス主義を批判的に検討し、新たな論点を提示するだけでなく、応用倫理的な問題への適用を試みる点に、本研究の学術的意義、および社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In order to construct the theory of sentimental virtue ethics, in this study, I focused on the Moral philosophy of Michael Slote, tried to organize and compare his theory with some contemporary virtue ethics. and applied his theory on some problems of applied ethics. As a result, this study accomplished the purposes in a measure. But there remains some further problem which we will have to solve, in order, precisely, to understand the Slote's moral philosophy in exact detail. The problem is whether the impossibility of perfection, which Slote insists against the eudaimonism, is valid or not.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：徳倫理学 マイケル・スロート 感情主義 アリストテレス主義 ヒューム 応用倫理学

1. 研究開始当初の背景

1958年に発表されたG. E. M. アンスコム論考“Modern Moral Philosophy”を嚆矢として復活を遂げたとされる徳倫理学は、1980年代に入り、A. マッキンタイアやB. ウィリアムズらの著作の公表により、一定の興隆を見せた。そしてその後、R. ハーストハウスが主著 *On Virtue Ethics* [1999] を上梓したことが、徳倫理学にとって決定的な出来事となる。彼女は、それまで徳倫理学に対して投げかけられていた「(悪しき) “共同体主義” という批判」や「徳の説明における循環の問題」を、P. フットの議論に着想を得た「自然主義的アプローチ」から「徳」を説明することにより回避し、そのことを通じて徳倫理学が、功利主義やカント的義務論などに対抗しうる規範的倫理学理論となりえる可能性を示したのである。

ハーストハウスの議論を受けて、21世紀に入ると、徳倫理学の潮流はさらに勢いを増し、いま現在も数多くの研究成果が発信され続けている。ところが、そのように発展を見せる徳倫理学においては、まずもって統一の見解を得ておくべき論点、すなわち、「徳」を捉える際の規準の設定、という根本問題について論争がいまだに続いており、決定的なものが打ち出されているとは言い難い。そしてそのために、徳倫理学が果たして、帰結主義や義務論に対抗しうる規範倫理学理論になり得ているのかどうか、怪しい状況にある。

たしかに、ハーストハウスを画期として、多くの論者が徳の捉え方に自然主義的なアプローチを採用し、それは主流となりつつある。自然主義的なアプローチを採用すると、徳倫理学に対する批判を避けられるだけでなく、次のようなメリットがあるからである。すなわち、それ以外の手法、たとえば形而上学的アプローチやメタ倫理的アプローチで徳を説明しようとする、徳の説明が独断による偏狭さを免れない、あるいは、徳の捉え方を内容空疎な言葉の問題にしていまいかねない。逆に、自然主義を採用すると、徳の神秘化・形式化を防ぐのみならず、徳を、現実のわれわれ人間についての実質的なもの、人間の事実のうちに見出すことで、徳が、われわれにとって手の届きうるものとなるからである (Cf. 佐藤岳詩 [2013] 「現代徳倫理学における自然主義と徳の規準」)。

しかし、自然主義的アプローチという方向に舵が取られつつあるとはいえ、自然主義の中でもさらに議論は細分化し、多くの論者が独自の規準をそれぞれに掲げ、そしてその対立状況に解消の兆しは見えていない。例えば、J. アナスは「ストア主義的自然主義」を (*Intelligent Virtue* [2011])、Ch. スワントンは「ニーチェ主義的自然主義」を (*The Virtue Ethics of Hume & Nietzsche* [2015])、そして、M. スロートは「感情主義的自然主義」の立場から (*The Ethics of Caring and Empathy* [2007], *Moral Sentimentalism* [2010])、徳を説明する。

こうした背景に鑑み、本研究は、自然主義的アプローチに倣しながらも、特に、感情主義的な立場から徳を説明するスロートに注目し、彼の理論を手がかりに研究を進める。その上で、「感情主義的徳倫理学」の立場から、グローバル化した現代が抱える問題に対し、従来とは異なる提言を示すことを試みる。

2. 研究の目的

本研究は、M・スロートの道徳哲学を手がかりに、感情主義的徳倫理学の構築を目指す。

3. 研究の方法

本研究の目的は、「感情主義的徳倫理学の構築」である。この目的達成のために、「道徳感情主義」を掲げるスロートの徳倫理学の内実、およびその到達点を確認し、それを現代の徳倫理学理論と比較した上で、「感情主義的徳倫理学」の立場から、現代に特有の問題(例えば、地球環境問題や、世界における貧困問題など)に対して、従来の合理主義が与えてきたものとは異なる解決案を提示する。

4. 研究成果

(1)研究初年度は、当初の計画である、スロートの理論の全容を解明するというものからさらに進んで、彼の感情主義的自然主義を再構成した上で、それと他の自然主義的アプローチとの比較検討を実施した。具体的には、ハーストハウスの「制約的自然主義」、そしてスワントンの「ニーチェ主義的自然主義」を取り上げ、それらに対して、スロートの「感情主義的自然主義」はどこまで優位に立つと言えるのか、検討した。その検討について、当初の予定では、理論内在的なファクターに注目する比較検討を行う予定だったが、研究の経過に照らした結果、現代社会にお

ける応用倫理学的問題の一つである情報倫理学の問題に、それぞれの理論がどのような解決策を与えるのか、ということ考察することを通じて行った。結論としては、スワントンのような多元的な徳理解を根底に置く理論の方が、スロートおよびハーストハウスのような一元的な徳理解に基づく理論よりも、情報倫理学の問題に対して、対応の柔軟性という点で若干の優位が認められるということが判明した。とはいえ、他の応用倫理学の問題に対しても、同様の話になるとは限らず、また、理論内在的な比較をすると、スロートの理論の方が強みを持っていると言いうる可能性もある。とりわけ、本年度の研究は、スロート理論の全容を完全に解明しきった上で行ったものではないため、今後は、スロートの、とりわけより最近の著作を精査した上での検討をするべきであるとの課題を、浮き彫りにした。

(2)研究二年目は、スロートの感情主義的自然主義と他の自然主義的アプローチとを、あらためて比較検討した。具体的には、ハーストハウスの「エウダイモニア主義」と、スワントンの「多元主義」とを取り上げ、それらに対して、スロートの「感情主義的自然主義」はどこまで優位に立つと言えるのか、研究会にて報告することで検討した。その検討においては、一元論的なハーストハウスに代表されるエウダイモニア主義の方が、やはり現代の倫理的諸問題への応用には適しているのではないかと考えられる一方、スロートの近著 *The Impossibility of Perfection* を精読した結果をふまえると、徳の目的である「幸福」の捉え方によって、理論それ自体の妥当性が問われることも議論の俎上にあげられた。具体的には、われわれ人間が、自身の「徳」をすべて磨き上げることで、「完成」に至ることができる、理論上想定しているかどうかで、理論の妥当性を問うことが可能であるかもしれないとスロートは主張しており、スロートが取り上げる従来の理論、なかでも特に「エウダイモニア主義」では、そのような「完成」は人間に可能であるとされている一方、スロート自身は、徳どうしが衝突しうること、その衝突は「思慮」などの支配的徳によっては解消が不可能であることを理由に、「徳・人間・幸福の完成」は不可能であると主張している。さて、この論点についてはそれがどこまで妥当であるのか、さらなる検討をしなければならず、その検討が、最終年度での継続課題となった。

(3)最終年度では、スロートの理論とその他の理論とを比較検討するための前提として、「幸福な生・徳のある生は、完成することが可能なのか」という論点を重点的に考察を進めた。様々な具体例が提示されながら説明される徳どうしの衝突問題、およびそこから導かれる「すべての徳を持つ」という理想、そして「倫理的な完成」という理想が、絶対に実現不可能なものだ」とするスロートの主張は、なるほど一定の説得力を持つものではある。ただ、このネガティブな主張のウマミについてのスロートの説明が、どこまで腑に落ちるものであるかは検討の余地があった。すなわち、われわれが直面し苦しむところの倫理的葛藤が生じるのは、われわれ自身や社会に欠陥があるからではなく、先進社会に生きる知的存在の条件の基礎をなすものなのであり、それを知ることは、ある意味われわれの慰めとなる、というスロートの説明は、他の理論(特にアリストテレス主義の主張)に対して、どこまで有効な説明となっているのか、検討の余地があった。そしてその検討の際に必要なであろう、優位性を判断する基準を、どのように設定すれば良いのかについても、さらに調査をする必要が生じた。他方で、スロートの理論は、「アリストテレス主義的一元論に対する」という意味での(しかも相対主義には陥らない)多元主義的なものだと思えることができるが、そうだとすると、スワントンの多元主義との比較によって、どちらに理論的な優位性があるのかについては、再度の検討を進めることができなかった。これらについては、今後取り組むべき課題として残されることになる。しかしながら、まずは、その多作さのために、理論が極めて複雑なことで知られるスロートの学説を、ある程度詳細に解析し、感情主義的徳倫理学の大枠を定める道筋を得たことは、徳倫理学研究にとってはもちろん、倫理学研究全体にとっても、意義深いことであると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 林 誓雄
2. 発表標題 「情報化社会と徳」の検討
3. 学会等名 第6回 Meta and Normative Ethics Research Meeting
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大槻晃右、澤田和範、豊川祥隆、林誓雄
2. 発表標題 「セッション ヒュームの因果的必然性をめぐる論争」
3. 学会等名 第45回 日本イギリス哲学会大会（オンライン）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 デイヴィッド ヒューム（著）、神野 慧一郎（翻訳）、林 誓雄（翻訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 307
3. 書名 ヒューム 道徳について	

1. 著者名 菊池 理夫（編・著）、有賀 誠（編・著）、田上 孝一（編・著）、渡邊雅弘、濱野靖一郎、矢吹久、田原 彰太郎、伊藤克彦、施光恒、中村隆志、伊藤恭彦、林誓雄、立花幸司、竹島博之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 282
3. 書名 徳と政治 徳倫理と政治哲学の接点	

〔産業財産権〕

〔その他〕

大会報告

林蒼雄、「企画責任者による総括、「セッション ヒュームの因果的必然性をめぐる論争」」、日本イギリス哲学会、『イギリス哲学研究』第44号、p. 113、2021年3月

書評

林蒼雄、「メタ倫理学に入門するためにー佐藤岳詩『メタ倫理学入門 道德のそのそもを考える』勁草書房、2017年」、西日本哲学会、『西日本哲学年報』第26号、pp. 95-101、2018年10月

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------